

重点課題	重点目標	自己評価		学校関係者評価 学校関係者の意見	次年度への課題と 今後の改善方策	
		評価指数と活動計画	評価			
<p>①確かな学力の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・該当学年の基礎的な力を身に付け、よく考える子どもの育成をめざす。 ・児童理解を深め、個をめざす。 	<p>①指導方法の工夫、教材研究、研究授業を行い、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための指導方法を共有する。</p> <p>②児童のコミュニケーション能力を高め、表現力を身に付けさせる。</p> <p>③家庭学習に積極的に取り組もうとする児童を育成する。</p> <p>④一人一人の教育的ニーズに対応した指導内容や方法等を明確にし、学習活動の充実を図る。</p>	<p>評価指数</p> <p>① ノートやタブレット端末を用い、自分の考えを深めたり広げたりすることができる」と答える児童が80%以上となる。</p> <p>② 授業中に先生や友達の話をよく聞いている」と答える児童が80%以上となる。</p> <p>③ 「忘れずに宿題をしている」と答える児童が80%以上となる。</p> <p>④-1 「特別な支援が必要な子どもについて共通理解をすることができている」と答えた教員が90%以上となる。</p> <p>④-2 「支援引き継ぎシートや個別の指導計画を作成し、個に応じた指導をすることができている」と答えた教員が90%以上となる。</p>	<p>評価指数の達成度</p> <p>① 児童は85%（前年度80.7%）と達成できた。</p> <p>② 肯定的回答は80%であった。前年度88.7%には達しなかったが、目標値は達成できた。</p> <p>③ 児童は83.9%（前年度87.9%）と達成できた。</p> <p>④-1 89.3%で達成できなかった。</p> <p>④-2 目標値に達しなかった。肯定的回答67.9%に今年度の回答項目に加えた「どちらともいえない」21.4%を合わせると、89.3%となり、昨年度の数値とほぼ同様になる。個に応じた指導は丁寧に行っているが、個別の指導計画作成等の手続きを行う過程において課題があるからである。</p>	<p>総合評定 (評定)</p> <p>B</p>	<p>・「授業中に先生や友達の話をよく聞いている」と答える児童の割合が減少しているということだが、授業参観では、タブレットを活用し意見交換する姿が見られた。</p> <p>自分の考えや思いを大勢にわかるように伝えることは課題だと思う。</p> <p>タブレットを有効に活用し判断力・思考力・表現力をつけてほしい。</p>	<p>○次年度も引き続き、学校力向上コラボレーション事業を通して、個に応じた指導や確かな学力をつけるための授業実践に取り組み、判断力・思考力・表現力の育成に取り組む。</p> <p>○ ICT 機器を積極的に活用し、児童が自主的・主体的に学習に取り組むよう授業改善を図る。また、「学びナビ」を活用し、学年に応じた話し方・聞き方ができる授業づくりに努める。</p> <p>○「家庭学習のてびき」や学年だよりで家庭への啓発を繰り返し行い家庭学習の定着を図る。家庭学習の在り方について教職員間で理解をさらに図っていく。</p> <p>○児童理解を深め、効果的な支援方法についての研修を通して、個に応じた適切な支援をさらにすすめていく。</p>
		<p>活動計画</p> <p>① 授業の習熟度を高めるために、板書の工夫やノート指導の研修をする。</p> <p>②-1 学年に応じた発表の仕方を示したり、話し合いを深める手立てを講じたりする。</p> <p>②-2 友達と意見を出し合い、深く考える場を設定する。</p> <p>③ 「家庭学習のてびき」を活用し指導する。</p> <p>④-1 定期的に、また必要に応じて校内委員会を開催し、個別の支援を必要とする児童の理解に努める。</p> <p>④-2 支援を必要とする児童に対する個別の記録を残し、個々の児童の実態に応じた支援を行う。</p>	<p>活動計画の実施状況</p> <p>① 授業の習熟度を高めるために、板書の工夫（ノート指導に対応した板書・思考の流れが視覚的に分かる板書）を意識して行った。</p> <p>②-1 スピーチする題やレベルを提示し、質問や感想を発表する機会を設定した。</p> <p>②-2 ペア活動やグループ活動など友達と意見を出し合い、深く考える場を設定した。</p> <p>③-1 家庭学習の手引きを配付し、家庭と連携して家庭学習が進められるようにした。</p> <p>③-2 家庭での学習時間を10分×学年となるよう共通理解をすすめた。</p> <p>④-1 終礼や研修の時間、支援が必要な児童の様子について情報共有し、適切な支援方法等について話し合う場を設けた。</p> <p>④-2 年度初めと2学期、年度末に個別の指導計画等の評価を行った。年度末には、児童の様子や有効だった支援方法、次年度の目標等を引き継ぐ。</p>			

「評定」の基準 A：十分達成できた B：おおむね達成できた C：達成できなかった

重点課題	重点目標	自己評価		学校関係者評価 学校関係者の意見	次年度への課題と今後の改善方策		
		評価指数と活動計画	評価				
<p>②豊かな心の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・よりよい自分や生活を創っていく力を身につける授業実践を行う。 ・自ら考え判断し、主体的によりよく生きようとする児童を育成する。 ・自分たちの生活や環境をよりよくしようと、自ら考え行動できる児童の育成を図る。 ・全校児童が元気よく登校するとともに、あいさつ等の基本的な生活習慣を定着させる。 	<p>①互いの違いを認め合い、だれとでも進んで関わろうとする児童を育成する。</p> <p>②正しく判断し、相手の気持ちに寄り添った行動ができる児童を育成する。</p> <p>③場に応じた適切な言葉遣いと相手を思いやる言動のとれる児童を育成する。</p> <p>④自分の生活を振り返り、よりよい生活をしようとする児童を育成する。</p> <p>⑤学級・学校の一員としてみんなのためになる活動に進んで取り組む児童を育成する。</p> <p>⑥学級目標や週目標などをもとにめあてをもち協力して実践しようとする児童を育成する。</p> <p>⑦進んであいさつする習慣を身に付けさせる。</p> <p>⑧学校のきまりや約束を守る姿勢を身に付けさせる。</p> <p>⑨児童の不登校やいじめ等の問題行動を未然に防ぐ。</p>	<p>評価指標</p> <p>①「自分のよいところや友達のよいところが言える」と振り返る児童が80%以上となる。</p> <p>②「困っている友達がいたら助ける」と振り返る児童が80%以上となる。</p> <p>③「家の人や友達、先生など周りの人に対して、その人を思いやった話し方や行動をしている」児童が80%以上になることをめざす。</p> <p>④「道徳の時間に勉強したことを自分の生活に生かすことができている」児童が85%以上になることをめざす。</p> <p>⑤「学級の話合いや係の仕事、委員会の仕事などに取り組むことができている」と答える児童が80%を超える。</p> <p>⑥「自分のめあてをもって、それに向けてがんばることができている」と答える児童が80%を超える。</p> <p>⑦「あいさつができている」と答える児童が90%をこえる。</p> <p>⑧「きまりや約束を守って生活している」と答える児童が90%をこえる。</p> <p>⑨全教職員が不登校やいじめ等の対応を必要とする児童について把握し、それぞれの立場で支援している。</p>	<p>評価指数の達成度</p> <p>①児童は84.6%（前年度84%）で達成できた。</p> <p>②児童は93.8%で達成できた。</p> <p>③児童は86.3%（前年度84.1%）で達成できた。</p> <p>④児童は83.7%（前年度81.6%）で目標値に達しなかった。</p> <p>⑤児童は87.8%（前年度87.7%）で達成できた。</p> <p>⑥児童は81.0%（前年度78.5%）で達成できた。</p> <p>⑦児童は84.4%（前年度87.7%）で達成できなかった。</p> <p>⑧児童は83.4%（前年度82.8%）で達成できなかった。</p> <p>⑨教職員は100%（前年度100%）で達成できた。</p>	<p>(評定)</p> <p>B</p> <p>(所見)</p> <p>○数値は前年度より上がった。様々な活動や人との関わりを通し、少しずつ自己肯定感や自尊感情をもつ児童が増えている。また、困っている友達を助けようとする児童が多いなど、優しい気持ちがあることが分かる。</p> <p>○あいさつについての肯定的回答は児童が84.4%、教職員は89.3%である。しかし、保護者の肯定的回答は56.4%であり、意識に差が見られる。</p> <p>○いじめ問題、生徒指導上の課題等については情報共有し、学校全体で対応、解決を図った。不登校の児童については、定期的な家庭訪問や電話連絡により、様子を確認し、保護者と連携を図っている。</p>	<p>・あいさつの肯定的評価が低い。あいさつするのを恥ずかしいと感じているのかもしれない。児童は知っている人にはあいさつができるが、知らない人にあいさつすることは難しいのだろう。不審者対応という観点から、誰にでもあいさつすることは難しい面もあるだろうが、旗を持って立哨している人にはあいさつをする習慣をつけられればよいのではないかと。あいさつの習慣づけは家庭での意識付けが必要だと思う。</p> <p>・言葉遣いが悪いという話があったが、SNSやゲームの影響が大きいのだろう。まずは、保護者がSNS等について正しい知識をもち、使い方を子どもに教えていく必要性を感じる。児童・保護者対象のSNS講演会で、講師が話していたように、まずは自分の言葉で正しく伝えることの大切を伝えていくことが重要だろう。</p>	<p>○児童が多面的に自分の良さに気付くことができるよう、異学年交流や、子ども園との交流など体験的な活動を意識的に増やしていく。また、学級でよいところさがしなど自尊心を高める活動を継続して行っていく。</p> <p>○各学年に応じたよいところみつけの活動や掲示を今後も継続して行っていく。</p> <p>○学期に一回あいさつ運動週間を設けるなど、全校で取り組む活動を企画する。</p> <p>○いじめ、不登校の未然防止に向け、全教職員で児童を見守っていく。さらに、関係機関等との連携を推進する。</p> <p>○SNSによるトラブルは喫緊の課題である。学級等で繰り返し指導をすると共に、家庭への啓発も繰り返し行う。また、児童・保護者を対象としたSNSの使い方についての講演会を実施し、トラブル等の未然防止を図る。</p> <p>○タブレット端末等を正しく安全に使用し、学習を進めるために学年に応じた情報モラル教育を推進する。</p>	
		活動計画		活動計画の実施状況			
		①-1 自分や友達のよさに気付くような掲示や発表の場を工夫する。		①-1 体験的活動や異学年交流等を通し、多面的に自分のよさに気付く活動を取り入れた。また、きらきらの木を掲示し、全校でよいところみつけに取り組んだ。			
		①-2 一人一人を大切に声かけを行い、互いに認め合う雰囲気づくりに努める。		①-2 各学級で人権尊重を基本においた教育活動を実施した。			
		② 正しい知識をもち、正しく判断する力と実践力がつくように授業を工夫する。		② 県人権主事会では全学年で授業を公開したり低中高に分かれての授業研究会を行ったりした。			
		③ 教職員間で場に応じた適切な言葉遣いについて共通理解し、全教職員で指導する。		③ 児童の言葉遣いについて教職員が共通理解し同一の指導を行った。			
		④ 年間計画にある道徳の時間を充実させ、児童一人一人が道徳的な価値のよさに気付くように努める。		④ 学習した内容を掲示し、学習後も道徳的価値意識させた。			
		⑤ 委員会や学活などで、児童自身の企画や運営による活動に取り組みさせる。		⑤ 年間計画を年度当初に立て、児童が主体的に委員会活動・係活動等に取り組めるようにした。			
		⑥ 学級で自らを振り返り、自分たちの課題を話し合い、めあてをもって生活するように働きかける。		⑥ 話し合いが活発になるよう、学級会の進め方を示したり思考ツールを活用したりした。			
		⑦-1 朝の登校時に正門前で児童会を中心としたあいさつ運動をする。		⑦-1 児童運営委員会が行っているあいさつ運動に自ら進んで参加する児童が増えている。			
		⑦-2 朝会であいさつの意味や正しいあいさつの仕方を指導する。		⑦-2 あいさつがよくできている児童を朝会で発表したり、あいさつ運動を啓発する掲示をしたりしてあいさつのよさや意義について全校で考えた。			
		⑦-3 全教職員による当番制の下校指導で、帰りのあいさつを指導する。		⑦-3 下校指導等であいさつの指導を徹底した。			
		⑦-4 校内だけでなく遠足や校外学習等においても指導する。		⑦-4 行事や長期休暇の前にあいさつについての指導を各学級で行った。			
		⑧-1 学校の実態に応じて具体的な週目標を決め、重点的に指導する。		⑧-1 2週間ごとに担当の教員が週目標を決め、学校全体で取り組んだ。			
		⑧-2 その場での指導と継続的な指導を行う。		⑧-2 学校全体で指導の基準を共通理解し、継続して指導ができるようにした。			
⑨-1 アンケートを活用し、いじめや不登校の早期発見・早期対応をする。		⑨-1 学期に一度生活アンケートを実施し、気になる児童には個別に面談を行うなど早期発見・早期対応に努めた。					
⑨-2 学級目標を話し合っ決めてることにより、支えあえる学級集団を育てる。		⑨-2 児童の意見のもとに学級目標を設定することで、より実態にあった目標となった。また目標達成への意識を高めることができた。					
⑨-3 全教職員の情報交換により児童のよさやがんばりを共有し、それを「ほめ言葉」として児童にフィードバックしていく。		⑨-3 研修計画に児童理解の場を設け、全教職員で情報共有・共通理解に取り組んだ。					

重点課題	重点目標	自己評価		学校関係者評価 学校関係者の意見	次年度への課題と 今後の改善方策
		評価指数と活動計画	評価		
<p>③健康な心と体の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> 運動のおもしろさを知り、進んで体力向上をめざす児童を育成する。 よりよい生活習慣をめざして、自ら課題を解決しようとする児童を育成する。 健康な生活を送るために、正しい食生活ができるようにする。 	<p>①様々な運動に親しむ機会を与えたり、体育の授業を充実させたりすることで、児童の運動への興味・関心を高め、体を動かすことが好きな児童を増やす。</p> <p>②基本的な生活習慣を確立し、心身ともに健康で、健やかに成長し、毎日元気に楽しく、心豊かに、充実した学校生活を送れるようにする。</p> <p>③よりよい食事ができるようにするとともにアレルギーへの共通理解を図る。</p>	<p>評価指数</p> <p>① 外で遊んだり、体を動かしたりすることが「好き」という児童の割合が90%以上となることをめざす。</p>	<p>評価指数の達成度</p> <p>① 85.2% (前年度 82.4%) で達成できなかった。</p>	<p>総合評価 (評定)</p> <p>B</p> <p>○評価指数①の目標を達成することはできなかったが、昨年の割合は上回ることであった。外遊びをする児童は多いが、運動への取組の二極化もみられる。</p> <p>○早寝・早起きはしているものの、朝ごはんを食べていない児童がみられる。そのため目標値が達成できなかった。</p>	<p>○児童の運動への取組の二極化を改善するために体育の指導法について校内研修を行い、運動する楽しさを味わわせる体育の授業づくりをすすめていく。</p> <p>○チャレンジランキングへの参加を多くの児童に促し、運動への取組の二極化を改善していく。</p> <p>○早寝・早起き・朝ごはんの中で、特に朝ごはんの大切さについて、指導を継続していく必要がある。「給食だより」「食育タイム」「保健だより」を活用して、児童、保護者にさらに啓発していく。</p>
		<p>② 「早寝・早起きし、朝ごはんを食べて登校できている」児童の割合が、80%以上となる。</p>	<p>② 78.0% (前年度 83.8%) で達成できなかった。</p>		
		<p>③ 「給食では自分の食べきれる量がわかり、バランスよく食べることができている」児童が80%以上となる。</p>	<p>③ 81.1% (前年度 81.4%) で達成できた。</p>		
		<p>活動計画</p> <p>①-1 トラックなどのラインが引きやすいよう運動場にポイントを打つなど学習環境を整え、児童の運動量を確保する。</p>	<p>活動計画の実施状況</p> <p>①-1 体育の授業を充実させる指導法について情報交換に心がけた。体育科年間計画を工夫することにより学習環境を整え、児童の運動量を確保する授業をすることができた。</p>		
		<p>①-2 体操・水泳・陸上・クロスカントリー大会などの練習を、選手だけでなく4年生や練習のみを希望する児童へも参加を呼びかけ、運動への意欲付けを図る。</p>	<p>①-2 学校体育連盟主催の3事業他、クロスカントリー大会や駅伝大会の練習に、選手候補以外の児童の参加があり、意欲付けを図ることができた。</p>		
		<p>①-3 チャレンジランキングへの参加や学習カードの活用など、様々な運動に親しむ機会を紹介し、時間や場の確保を図る。</p>	<p>①-3 市のチャレンジランキングに取り組んだクラスもあった。3月には体育委員会が「野球しようぜ」週間を実施し、ボール運動に親しんだ。</p>		
<p>② 学習成果・運動能力の向上等に大きな影響を及ぼす基本的な生活習慣の確立の大切さを、あらゆる機会を通して児童に指導するとともに、保護者にも啓蒙し、協力が得られるよう努める。</p>	<p>② 給食時、校内放送で基本的な生活習慣や感染症について話をし、児童に啓蒙した。生活リズムチェックを実施し、表に記録した。保護者からも感想をもらった。</p>				
<p>③ 給食時間や学活の時間等に、バランスのよい食事やマナーを指導するとともにアレルギー対応についての共通理解を行う。</p>	<p>③ 毎月、給食目標と食育だよりを教室に掲示した。食育タイムを保護者に配信して啓発に努めた。</p>				

「評定」の基準 A：十分達成できた B：おおむね達成できた C：達成できなかった

大松小学校総括評価表

④保護者・地域から信頼される学校

重点課題	重点目標	自己評価		学校関係者評価 学校関係者の意見	次年度への課題と 今後の改善方策
		評価指数と活動計画	評価		
④保護者・地域から信頼される学校 ・機能的な学校組織と活力ある学校づくりを図る。 ・自らの生命や安全は、自らで守るという意識を高める。	①学校経営方針に基づき、課題解決に向け協働し、主体的に実践・改善することができる教職員集団を形成する。 ②学校・家庭・地域・関係機関が連携し、安全で安心な学びの場づくりの体制を構築する。 ③どのような場面でも交通ルールに基づいた行動ができるようにする。 ④自然災害発生時等の緊急事態発生の際に、適切な行動がとれるように指導する。	評価指数 ① 自己評価の個別評価A、B達成を100%にするとともに、活躍の場があり職務に対してやりがいを感じている教職員が90%を超える。	評価指数の達成度 ① 職務にやりがいを感じていると肯定的評価をした教職員は89.3%で、目標値の90%にわずかに届かなかった。	総合評定 B (所見) ○木曜日課や時数見直しにより、研修の時間や児童の支援について協議する時間が増えた。教育活動の充実につながっている。 ○認定こども園との連携・交流を積極的に図った。創立150周年記念集会には地域の方を招待し交流した。学校運営協議会を通し、教育環境整備等の協力をいただいている。 ○「交通ルールを守っている」と答えた児童は80.3%、「子どもたちは交通ルールを守っている」と答えた保護者は68.2%で、意識に差が見られる。 ○こども園との合同避難訓練を実施した。 ○5月には警報発令時の下校方法を確認し、集団下校を実施した。改善点を話し合い、よりよい方法を検討した。 ○9月に引き渡し訓練を実施した。「引き渡し方法について子どもと確認できている」と答えた保護者は67.9%であった。	・今年度も家庭科の時間に地域の方がゲストティーチャーとして児童と関わった。コミセン祭りに児童の作品展示をしたり、敬老会で児童が高齢者に手紙を書いたりするなど、学校と地域のつながりは昨年度より強くなったように感じる。以前PTAとして関わっていた人がコミセン祭りの中心となり運営している。そのようなつながりは大切ではないだろうか。 ・津波や地震時の児童の引渡しと警報発令時の下校について保護者も混同しているところがある。整理し説明することが必要だろう。 ・災害時には、学校・地域全体で対処しなくてはならないだろう。一度に多くの訓練は難しいと思われる。少しずつ地域と連携した防災訓練の実施を計画できれば思う。
		② 「学校生活は楽しい」と答える児童が90%を超える。	② 昨年度は86.4%だったが、今年度の肯定的評価は91.6%となり、目標値90%を上回った。		
		③ 「道路の右側を1列で歩き、道路を渡る時には左右を確かめている」と答える児童が、90%以上となる。	③ 肯定的評価が昨年度に比べて0.9%下回っている。約8割が肯定的回答をしているが、目標の9割には達しなかった。		
		④-1 「避難訓練の事前指導を行い、また機会を捉えて安全指導を行い、そのことを避難訓練の際に生かすことができている。避難訓練の際、自分の担当の役割を果たすことができている」と答える教員が90%以上になる。	④-1 今年度は肯定的回答が89.3%で昨年度の100%を下回ったが、概ね目標の9割を達成している。		
		④-2 「災害時の児童引き渡し方法について子どもと確認できている」と答える保護者が85%以上になる。	④-2 肯定的回答が67.9%で昨年度より12.3%下回っている。		
		活動計画 ① 教職員の力量形成と組織力を高めるため、直接的な指導、学校評価、教員評価、校内研修を具体的に即して行うことで充実させる。	活動計画の実施状況 ① 学校力向上コラボレーション事業や県人権主事会を通して、教職員全体で目標を共有し、授業づくり、教師の指導力向上に取り組んだ。研修で学んだことや講師・参観者からの指導・助言を日々の教育活動に活かした。		
		②-1 コミュニティスクールを活用し、よりよい学校づくりについて検討し改善を図る。	②-1 年間3回学校運営協議会を実施した。地域・学校・児童の実情から、よりよい学校づくりに向け、協力・相談できる体制整備をしている。		
		②-2 必要に応じ関係機関と連携を図り、早期対応、早期解決に努める。	②-2 学級の中の気になる児童への支援について全教職員で検討したり、児童相談所やSC、SSWと連携したりして早期に対応している。		
		③-1 登下校時に教職員による通学路での交通安全指導を行う。	③-1 学期始めは、教職員が通学路で交通安全指導を実施。下校時は、教職員が正門で児童の下校指導を実施している。		
		③-2 交通安全教室を実施する。交通ルールに加え、ヘルメットの着用についても指導する。保護者への啓発を行う。	③-2 1・3年生を対象に交通安全教室を実施している。安全な下校や交通ルールを守った生活等について、校内放送等で児童に繰り返し指導している。また、学年だよりやメール等でも保護者に安全な生活を啓発している。		
④-1 自然災害発生時等における安全指導を機会を捉えて行う。	④-1 勝占認定こども園と合同で地震・津波を想定した避難訓練を行った。運動場への避難、校舎3階への避難ともにスムーズに行うことができた。また、移動消防署の実施により火災についての安全指導を行った。				
④-2 児童の引き渡し方法について確認・再確認のために保護者への広報を定期的に行う。	④-2 大地震等により児童を安全に下校させることが出来ない場合を想定し、引き渡し訓練を実施した。				